

卷頭言

「システム」を育てる

総合情報学部 准教授
小林 孝史

10数年前、義務教育から高等学校にかけての情報に関する科目が設置される以前には、大学における情報処理という名の科目は「情報リテラシー能力の開発・向上」を目標として開設されていました。当然ながら、この情報リテラシーは、単なるコンピュータを使う技能ではなく、コンピュータを始めとした情報機器、ネットワークを使用して、収集・蓄積した情報を整理・分析し、加工・表現・発信する能力全般のことです。

そして、教科「情報」の必修化後、一部で高等学校での未履修問題があったものの、初等教育の段階からコンピュータ等の情報機器に触れ、高等学校等までの間に学習指導要領に沿って情報リテラシーのうちの基本的な能力についての指導は行われてきているものとして、ここ数年の間に大学における情報処理教育のあり方の見直しが行われてきました。その大きな流れとして、多様な学問分野や社会的問題を解決するための様々な場面で情報技術の活用が求められるようになっている現状を踏まえて、「情報リテラシー教育」から、それぞれの情報技術に依存しない、情報を扱うための基本的な概念の教育や永続的な知的活用技術の修得を目指す、「情報フルーエンシー教育」へと舵が切られてきています。

現在、大学等に在籍している学生は、生まれた時もしくは物心ついた時から使っている情報技術が現在のような形である、いわゆる「デジタル・ネイティブ」な世代で、古いものを持んど知らないのが現状です。平成23年度に内閣府でまとめられた「青少年のインターネット利用環境実態調査」によると、高校生の95%以上が自分専用または家族共有の携帯電話を所有し、そして、携帯電話でのインターネット利用の経験はほぼ100%となっています。パソコンについては、自宅で日常的に使っている高校生は70%程度であり、携帯電話に比較すると日常的に利用しない生徒がかなり多いようです。パソコンが携帯電話のように気軽に使えない、取り扱いにくいもの、と感じているのかもしれません。小さい頃から携帯電話等の通信機器が身近にあり、あの小さな「窓」から携帯サイトを通じて世界を覗くことを日常的に行なっているようです。

当ITセンターで運用している情報システムやネットワークは、単に情報提供のために運営されているわけではなく、大学に所属する人たちとの間の情報伝達、講義・実習等の授業支援のためのツールとして活用されており、学生は入学直後からポータルサイトや授業支援

システムを日常的に利用する必要があります。ところが、システムごとにインターフェースが異なっていたり、様々なイベントの発生時に利用者が集中してしまってアクセスできなかつたり、一部を除いては、パソコンでの利用を前提とした画面構成になっており、ケイタイ・ネイティブな学生にとって、大学のシステムは面倒で使いにくいものになっているのかもしれません。アクセスしづらい問題に関しては、パソコン版より軽量にアクセスできるモバイル版が用意されているシステムもありますが、利用者がアクセス先を選ぶ必要もあって、どうしてもパソコン版に集中してしまうようです。情報機器やシステム等を利用するリテラシーは備えているものの、それらを「うまく」活用していくフルーエンシーはまだまだのようです。

情報セキュリティの面ではもっと深刻なことが言えるようで、ポリシーや基準・手順が示されていても、それらを実際に使う、システムやネットワークに「システムの構成員」として組み込まれた利用者ひとりひとりの認識が向上しない限り、セキュリティ対策としてはいつまでも不十分なままになってしまいます。

大学や授業支援・運営に関わるシステムの利用等については年度当初のガイダンス等で解消すべき事項とも考えられますが、各システムの利用ガイドを利用者目線で充実することや、トラブル時の対応窓口などを明確化することも含めて、利用者にとって使いやすい情報システムづくりを行い、別途利用上のトレーニング等をしなくても十分に使いこなせる情報システムを目指す必要があるのではないか、とも考えています。ITセンターでは、以前からも利用者からの要望を受け付けていましたが、平成23年度に手続きを明確化した「情報システム等の利活用に関する提案シート」によって、利用者からさまざまな提案を受けることができるようになりました。予算等の制約ですべての要望を実現することはできないかもしれません、利用者からの情報システムに対する思いを取り上げた、将来の情報システムづくりに活用することに大いに役立つと考えています。実際に利用する学生を含めたポータルサイトを検討するためのプロジェクトも立ち上がり、将来のシステムをどうするかということの検討も既に始まっています。

ITセンターでは毎年、数多くの情報システム等の更新・改修作業が発生します。その内容については、情報技術そのものの進歩のみならず、教育工学上の研究成果やインターフェース工学その他分野の成果等も加えることで、システムをより一層使いやすく、教育効果の上がるものになったり、研究活動の大きな支えになったりすることと思います。また、本年報にご寄稿いただいております、たくさんの先生方の研究成果が、関西大学の教育研究における情報技術の活用のみならず、人を含めた関西大学という「システム」の成長に大きな影響力を与えていただくことを願いまして、巻頭言の締めくくりといたします。

2012年3月

(ITセンター委員)